

はじめに

この本を手に取り、見開き読み始めた皆さまが、なぜこの本に興味をもたれたのか。本を初めて出す私にとって、それは本当に興味があることです。できることならここで直接あなたに「なぜですか!？」と聞きたいほどです。残念ながら、今そのように、本から飛び出して直接聞いてみることは叶いませんが、この本を手を取ったあなたが、発達障害に関心を持つてくれる方、もしくはこれから発達障害のことを知っていきたいと思っっている方であればとても嬉しい限りです。

私は現在、兵庫県で放課後等デイサービスの運営をしています。放課後等デイサービス（以下、放デイ）とは、発達障害の子どもたちの通う学童や習い事の教室のようなイメージでしょうか。自閉症スペクトラム症やADHD（注意欠如・多動性障害）やLD（学習障害）といった、主に発達障害を抱える子どもたち（小学1年生～高校3年生）が放課後に通うことのできる療育施設のことです。

私の施設にもいろんな子どもたちが来ます。コミュニケーションが苦手な子、字が書けない子、字が読めない子、衝動的に走り回る子、「うんこ……っ!」と楽しそうに叫び連呼している子、本当

に様々です。一般的に見て社会生活において困難をきたす可能性があるかもしれませんが、それらの行動や特性は、彼らの一つの側面でしかなく、見方を変えれば長所になることもあります。

私が起業し放デイを立ち上げたのは、私の子どもが発達障害だったことが大きなキッカケでした。比較的早い段階で発達障害という診断が下ったのですが、私は長い間、この「障害」という言葉に対して、どうにも腑に落ちませんでした。「障害」は「可哀想」とか「劣っている」というイメージが社会には根強く残っています。今となつては本だったのか、TVだったのか、何だったのかは思い出せませんが、『発達障害とは発達の凸凹』のことなんだ！ と知ったことで今までモヤモヤしていたものが一気に吹き飛びました。

そうか！

発達障害というのは発達における大きな凸凹（得意と不得意）のことなのか!! と。障害というと本来できるはずのことができないという見方が多く、当時の私もそのようにとらえていました。しかし、得意なことと苦手なことの差がとても激しく、それが生きるうえでの障害になっているという伝え方ができるようになりました。今の福祉の業界では凸凹という言葉は珍しい表現ではないのですが、当時の私の中で「障害」という言葉が「凸凹」という言葉に変わったことは、自分の中の発達

障害に対するとらえ方が大きく変化したのと同時に、大きな希望を得たように感じました。

それをきっかけに、自分の子どもを含めた発達に凸凹を持つ子どもたちの長所を伸ばせるようなワクワクする施設を作ろう！ と当時、勤めていた学校法人で企画しプレゼンを行い、同法人の東京にある大学内でその施設は実現することとなりました。大きな学校法人が発達障害の子どもたちの長所を伸ばす施設を作る！ というのは当時非常に珍しいニュースではあったので、新聞や雑誌にも多く取り上げていただきました。当時の活動が今の起業につながっていくのですが、きっかけはそのプレゼンの企画立案の際に「発達に凸凹のある子どもたちの長所を伸ばせる、そんな面白そうなところ（施設）があったらいいのにな」という私の一言からでした。そんな未来への希望に思いを馳せた言葉の雫は、小さな波紋を生み、それが水の如く流れとなり、社会を巻き込む大きなうねりとなっていたのでした。

そして、実際にその施設を設立することができたことは、非常に大きな経験となりました。ないものを作り出す、0から1に変えていく、自分にも社会を変えることができるかもしれないと思うことができました。

もちろんのことながら言うのもおこがましいのですが、私は決して優秀な人間ではありません。いや、むしろ凸凹の激しさはかなりあるほうなので、苦手な部分は本当にどうしようもないことが多い

です。特に「相手の気持ちを相手の立場に立つて考えること」とかはとても苦手です。福祉に携わっているのに、と自分でも申し訳ない気分になることも多々あります。

しかし、だからこそ、苦手があってもきつかけがあれば、誰もが何かを生み出す力や、社会を変え力を持つているのだとも感じています。人には得手不得手があるのが当たり前で、きつと人はそういうものなんだとも思うのです。

『発達障害は発達凸凹』この言葉は私の思考の原点です。発達障害のこと、療育のこと、放デイのこと、福祉のこと、父として思うこと、そして我々の子どもたちと未来のこと。自分自身の率直な気持ちをここで話させていたきたいと思います。

ただし、これはあくまで私の拙い経験と知識から、私が感じた一個人の意見であることを最初に言うておきたいのと、個人情報の兼ね合いもあるため個人やそのご家庭を特定できるようなエピソード等はもろんのことながらお話しできないため、一般的な事例と混ぜ、よくある話として話させていたたくこともご了承ください。また、子どもの名前等はもろん仮名であることもご了承ください。

この本を通じて発達障害に対する認知や、発達障害の子を持つ親としてのつながり、そして彼らの明るい未来へ少しでもつなげるのできる書籍となれば幸いです。